# この世に太陽が　母なる大地があるかぎり

## ―たかが梅干し、されど……わが生命救ひし梅干し―

飯島　八重子
中央二丁目

ここ中野宝仙寺裏の露地、籬からこぼれるように咲いていた大輪の紫陽花が、日ましに強まる日射しに萎れ枯れるころ、今年もまた燃えるような暑い夏の訪れをみますと、広島はもとより、私の故郷長崎も華やかな街に、被爆の陰は薄らぎ、人は老い、あの忌まわしい体験は風化しつつあるといいます。昭和二〇年八月九日。あの逃れようもない悲惨な地獄の光景が私の脳裡に甦り、走馬灯のように思い出され、激しく魂をゆさぶられるのです。

爆死からのがれて、直接の被害といったら、爆風でわが家の屋根瓦が吹きとび、ガラス戸や鎧が粉々にくだけたといった程度で、万死に一生、一期一度の稀なる幸運をえて、こんにち六十五歳と生き永らえております。

被爆当日、そしてその前後の去就を、ともすれば消えなんとする記憶を辿って、認めさせていただきます。この拙い史が、一被爆者の語り部として、私の子から孫へ――と、そして戦争を知らないお子たちへの、後々の語り草となりましたら、幸せこれにすぐるものはありません。

鶴の港といわれた、浜に沿った浪の平の生家から歩いて二〇分ほど、切り通し（いまのオランダ坂）を登った活水女学校に在学中の私が、三年生となった昭和十九年秋、学徒勤労動員令によって、十月に入り私の学校は上級生始めクラス全員、三菱造船・飽ノ浦工場に動員。ところが、私たちのクラスだけ、三菱兵器・大橋工場に配属され、それこそ否応なく学業は放棄、スカートを木綿絣のモンペにはき代え、細い二のうでに腕章を巻き、すでにそのころ正規の運転士さんは召集や徴用で一人もいなく、工業学校の学生さんの運転するチンチン電車、それがいつも鮨詰めの満員でぎゅうぎゅうに押し込まれ、大橋の終点で下車十分くらいで工場。あとは夕方五時ごろまで、一億総決戦下の乙女として、只々お国のためと、形振りかまわず必死に働きました。

兵器工場では、クラスの中で私を含む十五名は、工作技術課といった机の上での仕事。そこには九州の五高、七高、他の旧

制高校生、熊工の生徒さんまで動員、その方々が鉛筆で書かれた精密な図面を、私たちがトレースするといった作業を与えられましたが、なんせそれまで烏口といった製図用具など手にしたこともなく、難業苦業の末、どうやら線引きができるようになりました。

ただ、唯一の救いは、私たちの課長さんが、いまの東大、当時の東京帝大出身で、お昼休みなどコーラスをやったり、お喋りさせてくれたり、巧みに女学生らしい雰囲気を醸してくれ、とても優しく思いやりのある方で、ほかの現場で真黒になって働くクラスメートと異り、地獄に仏の思いでした。

誰からも敬慕された課長さんも、爆心地から僅か一・五キロの大橋工場で被爆、ついに帰らぬ人となったと聞き、私たちも涙しました。

そうした勤労の日々、旧制高校の生徒さんが一人、また一人と応召、その度に学友の方々スクラムを組み、寮歌や応援歌を蛮声を張り上げての悲愴な歓迎、私たちは泣くにも泣けない辛さでした。

昭和二〇年となりますと、老いも若きも国民総動員戦争への態勢は益々強化され「一億玉砕」。私たち女子学生も戦争遂行のために、無我夢中で工場の増産に励んでおりましたが、大橋工場の私たちクラスは、他のクラスと同じように、飽ノ浦・三菱造船へ移されることに決まりました。

それでは（お別れ会）と、それまで苦楽をともにした方々と、五月二七日茂木に遠足、戦時下と思えない楽しいピクニックの一日でした。食べ物といえば代用食が日常化、すべてが配給となり、それもこと欠く始末で、雑食総動員時代、その時の一粒の枇杷は貴重なものに思われ勿体なく、その甘い汁は生涯忘れることなく、いまだに舌に残ってます。

五月二九日の解隊式が遅延し、六月二七日。八ヵ月余り通い詰めた大橋工場に、万感の思いを残して去ったものでした。

あの原爆の日まで大橋工場だったら、私たちはどうなっていたことでしょう。私たちと入れ替わりになった県立高女の方々に思いをいたすとき、長崎七万余の犠牲者のなかに加えられてしまったのではと……お気の毒だけでは済まされませんでした。

七月二日、飽ノ浦・三菱造船への入所式。そこは鋳物工場で、その日から私たちは裸足になって、木型に鋳物砂を詰め込む作業をさせられました。

一ヵ月ほど経った八月一日でしたか、私は城山国民学校そばの、親友浜田妙子さんのお家に泊まっていて、飽ノ浦工場付近に爆弾が落とされたと聞き、翌日二人とも工場をサボって、彼女の近くの護国神社に詣で、造船所内の学友のご無事を敬虔に祈願したものです。

それから暫くは、工場に行っても、一部灰燼と帰した後片付けで、ろくに仕事にはなりませんでした。家に帰っても、連日

連夜厳しい空襲に脅かされ、夜になっても布団に寝ることなどなく、窮屈な防空壕で膝をかかえて、眠るに眠れず朝を迎えていました。

八月八日原爆の前日。例の城山の妙子さんが、ここ数日工場を欠勤されていましたので、私は心配の余り、定刻五時、工場を退所後、電車が動きませんので歩いて彼女を尋ねました。夏とはいえ、すでにたそがれた彼女の部屋に通され驚きました。そのころの私たちは長髪だったのに、彼女は切り落としてお河童頭。お母様を亡くされた後、弟さんが腸チフスで入院中とのこと、ご自分が看病で、一ヵ月ほどすればまた伸びるさと他人事みたいにけろりとしていて、弟さんが梅干を欲しがっているのに、それがなくて困っているという。梅干なら私の家にあるので、「今晩帰って明日持ってきてあげる」といえば、「急がなくてもいい」、「今晩は泊って」、「いや帰る」、「泊っていって」と押し問答の揚句、私は彼女の手を振り切るようにして、家路へと急ぎました。

いつもの私なら、素直に彼女の誘いに応じていたでしょうに、その夜はなんだか強い力で我が家に引き寄せられると同時に、さも梅干に憑り付かれでもしたように、わが家の梅干が頭のなかいっぱいに広がっていました。その道すがら、翌日はこの世から永遠に去られた、恩師やお友だち何人かにお逢いしたものの、簡単にご挨拶を交わしただけで、永の別れとなることなど露知らず——。

翌九日。十一時〇二分……、しばしの空襲警報が解除され、ホットとして防空壕から出て工場内に戻った瞬間、一大轟音が天地を揺がし、ピカッと無気味な青白い閃光が天地を切り裂くかのように走った途端、頭上から種々雑多なものが雨霰と落ちてきました。私はいつもの習慣で、咄嗟にうつ伏せになっていました。それからどれほどの時間が経ったのでしょうか、放心状態で家の敷居をまたぎ、無事だった家族の顔をみて、はじめて人心地の付いたことを思い出します。

その日から、浦上方面一帯、空いっぱい真赤になって燃え広がり、天をも焦がすかのように、三日三晩燃え続けるのをみていましたが、その恐ろしかったこと、さながらこの世の紅蓮地獄を思わせていました。

そんなことで、すっかり忘れていた梅干から、急に浜田妙子さんの安否が気遣われましたが、どうすることもできないうち、九月になって彼女が哀れにも亡くなられたことを人伝に知らされ、愁しみは尽きませんでした。

私の父は父で、家の近くで避難者が倒れ、夏のこととて腐爛蛆が湧くのを見るに見かねて、造船業をなりわいとしていましたので、古材を集めて丁重に荼毘に付したり、乞われては柩を造って遺体を納めたり、奔走していたりしたせいか、それまで頑健であった父が昭和二六年八月十五日、肝臓癌で四十六歳の

働き盛りで他界しました。おそらく放射能汚染が原因と考えられましたが、そのころ、なにもいうことはできませんでした。

終戦。軍需工場から解放され、本来の女学生に復帰できた私は、右腋下リンパ節腫といって外科での切開手術、いまほど適切な処置や薬もない時代、半年ほど右半身包帯ぐるみ、制服の着脱に悲鳴を上げては家人を困らせました。いまだに大きな傷痕が残っています。

女学校卒業後、長崎ドレスメーカーに学ぶも、なお目黒のドレスメーカーに進学。その上京の日、長崎駅を発車して間もなく、汽車の窓から私の眼を射たものは、一面焦土と化し、廃墟となった、かつての大橋あたり、曲った鉄骨を曝けだしている工場跡や、百年草木も生えないといわれた大地には、燦々と降り注ぐも、なんとなくもの柔らかな早春の太陽の下、伸び放題に若草が茂り、尖った葉先きを空に向けてもたげているではありませんか。めくるめく自然の恵みに驚かされ。それに逞しく生き残った人たちの、一途な生への営みとでも申しましょうか、あちこちに点在したバラック小舎といえる、小さな家々が私の眼を捉えて放しませんでした。

そしてそれが戦後の私をどんなに励ましてくれたことでしょう。昭和二八年二月、一家を挙げて上京、昭和五五年一月十三日、母が七一歳、胆のう癌で永眠。私が平成元年三月右乳房にポリープ発生、悪性に転化せぬうちに削除といった手術。只今変形性脊椎症にて通院と、波乱をきわめても、祖国の復興に合わせて勇気を持って生きることができ、郷土の数多のご精霊の菩提をも弔うこともできることを、日々感謝いたしております。

合掌